



出張報告届

令和 8 年 3 月 2 3 日

吹田市議会議長様

会派名 吹田党・参政党議員団

代表者氏名 後藤恭平

出張者氏名 中西勇太

下記のとおり出張したので届け出ます。

記

出張先	西日本工業大学 (福岡県京都郡苅田町新津 1 丁目 1 1)
期間	令和 8 年 2 月 1 1 日から 2 月 1 1 日まで 1 日間
出張の成果	別紙のとおり
備考	視察スケジュール 2 月 1 1 日 (水) 10 : 00 ~ 16 : 30 子どもまんなかフォーラム 2026 in 福岡 (西日本工業大学)

## 研修報告書

吹田党・参政党議員団

中西勇太

子どもまんなかフォーラム 2026 in 福岡

令和8年2月11日

### 1 研修の背景

子どもたちの健全な育成を支える政策を教育・福祉・食・環境といった分野を横断的に捉え考える必要性がある。現代は、少子化や発達障害の増加、不登校の増加といった子どもたちに係る心身の健康課題が深刻化し複雑化している。その中で、食、環境の重要性を再評価し持続可能な循環システムで成り立つ社会の実現を目指し、本フォーラムでは、生活環境（洗浄剤・香料）／食（米・栄養）／農（有機）／資源循環（リサイクル）／子どもの発達支援（腸脳相関等）を横断し、自治体施策へ接続しうる論点が整理され共有された。吹田市の学校給食、母子支援、環境政策、産業・地域循環の設計に活かすことを目的に参加した。

### 2 研修の内容

#### （1）講義1：シャボン玉石けんの歴史、無添加石けん、香害問題

- ・合成洗剤から無添加石けんへ事業転換し、長期赤字を経ても「健康な体と綺麗な水を守る」理念を貫いた企業史が示された。
- ・「無添加」表示は法的表示と実質のギャップがあり、成分表示の確認が重要である点が共有された。
- ・柔軟剤等の香料による健康被害（香害）が、化学物質過敏症の一種として社会課題化しており、公共空間・学校等での配慮と啓発の必要性が示された。

#### （2）講義2：東洋ライス「金芽米」の技術と社会貢献

- ・「亜糊粉層（あこふんそう）」を残す特殊精米により、おいしさと栄養価の両立を狙う技術（＝品種ではなく“精米方法”）として整理された。
- ・社員食堂導入後に一人当たり医療費が全国平均の約6割になった等、健康アウトカムを意識した社会貢献の方向性が示された。
- ・自治体連携事例として、妊婦への配布や学校給食導入での残食低減等が紹介され、初年度支援→2年目以降自治体継続の提案も言及された。

#### （3）講演3：有機農業の地域連携・技術革新と政策動向（青森・佐藤拓郎氏）

- ・12人で78ha（うち59ha有機）を運営し、\*\*「浅く耕し、遅く植える」\*\*などで低コスト有機農法を実装している実例が共有された。
- ・国の動向として、2021年「みどりの食料システム戦略」（2050年：化学農薬50%低減・有機25%）の流れが整理された。
- ・ネオニコチノイド系農薬等の健康・生態系影響の懸念、そして学校給食の有機化が持つ意義が示された。

#### （4）講演4：みんなが参加する循環型社会（ケミカルリサイクル）

- ・日本のケミカルリサイクル技術により、使用済みプラ等を分子レベルで再生し「地上資源」として循環させる考え方が示された。

- ・行動変容の鍵として、環境配慮を「正しい」から「楽しい」に転換し、市民参加を広げる実装論（例：企業連携・回収ネットワーク等）が共有された。

（５）講演５：食と子どもの発達、地域活性化（前島由美氏）

- ・「脳＝腸」視点（腸内環境・ミネラル・発酵食等）で、発達や情緒・行動の変化が起こり得るという事例が紹介され、薬物依存に頼らない支援の方向性が示された。

- ・自治体実装例として、学校給食への米導入（月１回）や、１歳児家庭への毎月配布、試食・現場実演で導入障壁を下げる手法、低温保管・輸送やロット加工等の実務課題解決が紹介された。

- ・農福連携（障がい者就労×有機農業×給食供給）により、賃金・税収創出と医療費抑制の循環を狙う構想、また官民包括連携・寄付等を組み合わせた運営の考え方が示された。

### ３ 研修からの学びと今後への活用

- ・学校給食の「質」の向上（段階導入）

無添加調理、米の質（精米技術も含む）、有機食材の導入などを、単年度で一気に変えることを目指すだけではなく、月１回・モデル校等から開始し、残食・体調・集中度等の指標で検証していくこと。

- ・妊産婦・乳幼児への栄養支援とアウトカム評価

妊婦支援（栄養・食材支援）を、出生体重や低出生体重児比率などアウトカムで評価する設計が重要である。

- ・香害への配慮（公共施設・学校）

香料による体調不良を訴える住民がいる前提で、庁舎・学校・公共交通等での啓発（周知ポスター、配慮依頼文、相談導線の整理）を検討する。

- ・市民参加型の資源循環（“正しいを楽しいに”で設計）

回収の仕組みを「義務」ではなく「体験」にし、学校教育・地域イベント・企業連携と接続して参加者を広げる発想が有効である。

- ・農福連携・地域循環共生圏の視点

福祉就労と農、給食、健康づくりを接続し、地域内で「人・物・お金」が循環する設計（小さく始めて検証→拡大）を検討する。

上記、学びを今後へ活用し吹田市における学校給食や家庭における「食育」の推進、栄養価の高い農産物の供給体制の構築、母子支援、教育政策、農との連携政策、環境政策へとつなげ、食・農・健康・環境が有機的に結びついたまちづくりを実現していきたい。

以上